

## 大学生と読書、図書館

法学部教授 大川 四郎

### (一) はじめに

昨年度より私は図書委員を拝命した。このたび、図書館報「韋編」編集部から「何か一文を」との要望が寄せられた。そこで、年寄りの繰言になることを覚悟しつつも、以下では、学生の皆さんに、大学時代に典籍を読んでおくべきこと、図書館を大いに利用すべきことについて、申し上げたい。

### (二) 大学生時代に典籍を読んでおくべきこと

では、大学時代にどのような読書をしておくべきだろうか。私としては、皆さんに特定の方向を強制したくはない。とはいっても、限られた時間を有効に読書に充てるには、何らかの指針があると有益であろう。

この点で一つの指針となるのが、1930年代アメリカの新興シカゴ大学にて、30歳で総長となった法哲学者ロバート・メイナード・ハッチンスが、哲学者モーティマー・J・アドラー、文筆家チャールズ・ヴァン・ドーレンの協力を仰ぎ、開始した「グレイト・ブックス」プログラムである。

「グレイト・ブックス」とは、古代ギリシアのソクラテスに始まり、20世紀アメリカのジョン・デューイに至るまで、西洋文明の礎となる文筆家74名の諸著作の中から精選した典籍443点のことである。その内容は、文学から哲学、自然科学にまでおよんでいる。このプロ

グラムでは、総長自らアドラーと共に、ソクラテス・メソッドを使い、テーマごとに選定した典籍英訳テキストを講読し、各論者の意見を比較対照して、西洋文明の基盤が対話にあることを、受講者らに理解させようとした(1)。この試みは大成功を取めた。当時カリフォルニア大学バークレー校に学生として在籍していたスーザン・ゾントーク女史が、評判を聞きつけ、新興シカゴ大学に転学してきたほどである。広く全米に普及させようという趣旨で、プログラムで使用された典籍の英訳が、シカゴ大学と連携したエンサイクロペディア・ブリタニカ社から、全60巻から成る、西洋古典英訳シリーズ "Great books of the Western World" として刊行された(2)。

このシリーズは2つの産物をもたらした。第1は、全60巻を1冊に縮刷した『西洋思想の偉大な宝庫』(3)である。テーマごとに、シリーズの中の典籍から関連する箇所を抜粋したアンソロジー形式になっており、読者は諸論者らと共に伝統ある討議に参加できる構成になっている。第2は、膨大なシリーズを効率よく読み進むために、優れた読書案内書が編まれたことである。これが、前述のアドラーと、エンサイクロペディア・ブリタニカ社の編集者チャールズ・ヴァン・ドーレンとの共著である、『いかに本を読むか』(4)である。

意欲のある学生の皆さんは、高校までに習得した英語力を総動員して、「グレート・ブックス」シリーズあるいは『西洋思想の偉大な宝庫』に挑戦してみてほしい。英語と聞いて敬遠する向きには、岩波文庫、「世界の名著」(中央公論社)、「人類の知的遺産」(講談社)各シリーズに所収されている既刊の邦訳西洋古典を利用されるとよい。望むらくは、私達は日本人なのであるから、日本、そして中国の典籍にも親しんでおくべきであろう。これについては、岩波文庫、「日本の名著」(中央公論社)、「日本思想大系」(岩波書店)、「新釈漢文大系」(明治書院)各シリーズがある。そうすることにより、「孤独な書齋に、古今東西の」賢人を「招聘し賑やかに意見の交換ができる」(5)はずである。

### (三) 図書館の利用について

個人で所有できる蔵書数にはスペースの点から言っても、財政的にも限りがある。そこで、図書館を利用するに越したことはない。かつて大学生であった私がそうであったように、現在の学生の皆さんの大半にとっても、図書館とは、自分が関心ある図書を静かに閲覧(読書)する書齋の場であり、あるいは借り出す無料貸本屋であろう。試験期間前そしてその真最中には、格好の自習室ともなろう。また、図書館では、書架から興味ある図書を手にとり、拾い読みしていく自由閲覧(ブラウジング)をしていると、意外な着想に恵まれることがある。

だが、図書館の持っているもう一つの重要な機能は、情報を収集し、これをもとにオリジナルな思想を創造する場でもある、ということだ。演習で課せられた報告や、あるいは、卒業論文執筆の準備で、図書館を利用する場合がこれにあたる。まず、図書館には、同じテーマについて、様々な立場の論者により書き著された図書が所蔵されている。これらの文献を参照することにより、現状での問題状況を整理することができるであろう。ところが、更に一步踏み込み、多少なりとも創造的なりサーチを始めると、たちまち利用できる文献に枯渇してしまう。学生の皆さんの中でも、学部卒業論文、大学院修士・博士論文を現に執筆中の方、また、教員の先生方ならば、思い当

たることが多いのではないか。むしろ、必要とするデータが直接には出てこないとか、愛知大学図書館に該当する文献が所蔵されていないという状態の方が当たり前なのである。また、インターネット上で、かなりの情報を得ることができるが、必ずしも総てのデータが信頼できるとは限らない(6)。

このような場合に、役立つのが図書館のレファレンス・サービスである。図書館職員の方々が、専門の書誌的知識を駆使し、さらには長年の経験に裏打ちされた勘を働かせて、利用者が必要としているデータや、文献を探し出してくれる。私ども研究者の場合、図書館というと、むしろこのレファレンス・サービスに恩恵をこうむっていることが多い。

19世紀末に亡命先のロンドンで、カール・マルクスが、その思想を未完の大著『資本論』にまとめあげるにあたり、長年毎日、大英博物館図書館閲覧室に通っていたエピソードは、有名である。彼は、図書館所蔵の文献から膨大な抜書きを作り、それらを分析し、資本主義経済体制のカラクリを明かしてみせた。この研究は、当時、閲覧室に勤務していた司書らから、その該博な書誌知識に裏付けされたレファレンス・サービスの提供がなければ、不可能であったろう(7)。図書館の創造的な利用の好例である。

我が愛知大学図書館には、大英帝国博物館のような無尽蔵の蔵書はない。しかし、時間を要するとはいえ、国内外図書館間での相互貸借制度により、必要とする文献の実物、あるいは該当箇所のコピーを取り寄せることができる。また、ゼミでのレポートや卒業論文のテーマに関わる文献・資料のことで、参考カウンターで相談しても、図書館事務課の職員の皆さんがすぐに対応できないことがあろう。だが、あきらめてはいけない。私の経験では、事務課の皆さんが、周辺大学図書館のレファレンス担当者の方々に相談するなどして、何らかの対応をして下さった(8)。こうしたサービスは、電子メール等を駆使することにより、私の学部学生時代に比べ、格段に早くなっている。要するに、身近な愛知大学図書館を通じて、私たちは広く全世界の知識網につながっている(9)。学生の皆さんは、大いに図書館を利用し、知的創造に挑戦してほしい。

## (四) むすびに

学生の皆さんには、大学在学中は無論、卒業後も読書を続けて思索を深め、心豊かな生活をおくって下さることを私は願っている。

\*\*\*\*\*

注)

(1) 「グレイト・ブックス」プログラムの経緯については、次の文献を参照されたい。Cf., Alex Beam, “A Great Idea at the time – The Rise, Fall, and Curious Afterlife of the Great Books”, PublicAffairs, New York, 2008.

(2) 本学図書館に所蔵されている。ちなみに、読書家でもあった俳優の故児玉清さんは、俳優としてまだ駆け出し時代に、大枚をはたき、この「グレイト・ブックス」シリーズを購入している。事前に相談すらしなかったことを、新婚間もない夫人からなじられると、「こういう本は女房を質に入れても買うべき本なのだ」と児玉さんは言っていた。このため、しばらく夫婦仲がぎくしゃくしたとのことである(児玉清著『寝ても覚めても本の虫』、新潮文庫、2007年、pp.353-355)。「女房を質に入れて」でも本を買うとは明らかに言い過ぎであるが、「稀代の本の目利き」であった児玉さんらしいエピソードである。

(3) "Great treasury of Western thought: a compendium of important statements on man and his institutions by the great thinkers in Western history", edited by Mortimer J. Adler and Charles Van Doren, Bowker, New York, 1977, xxv+1771p. 本学図書館に所蔵されている。

(4) Mortimer J. Adler/Charles Van Doren, “How to read a book – the classic guide to intelligent reading (revised and updated edition)”, A Touchstone Book, published by Simon & Schuster, New York/London/Toronto/Sydney, 1972. 本学では豊橋図書館に1967年版が所蔵されている。我国では、外山滋比古・榎未知子共訳『本を読む本』(講談社学術文庫、1997年)として出版されている。原著第3編「様々な種類の本へのアプローチ方法」では、文学、戯曲、歴史、自然科学、哲学、社会科学各分野にわたって、読書方法が懇切丁寧に叙述されている。講談社学術文庫版では、文学分野しか訳出されておらず、残念である。

(5) 國原吉之助著『ラテン詩への誘い』、大学書林、2009年、p.284.

(6) 本学文学部で図書館情報学を講じておられる時実象一教授の一文を参照されたい(時実象一「ウィキペディア 安易な引用はやめよう」、2007年7月24日付朝日新聞日刊第15面コラム「私の視点」)。

(7) 当時、閲覧室監督官であったリチャード・ガーネットは、その豊富な書誌知識を、分け隔てなく利用者らに提供していた。このため、ここを訪れる外国人研究者らに高く評価されていたという。マルクス、そしてその仕事を手伝っていた末娘エレノアもそれら利用者に含まれるであろう(松居竜五・小山騰・牧田健史共著『達人たちの大英博物館』、講談社メティエ、講談社、1996年、pp. 71-72, 244-245. 藤野幸雄・藤野寛之共著『図書館を育てた人々 イギリス編 (JLA図書館実践シリーズ第8巻)』、日本図書館協会、2007年、pp.74-80. Cf., art.' Garnett, Richard (1789-1850)' by Alan Bell, in "Oxford Dictionary of National Biography" edited by H.C.C. Matthew and Brian Harrison, volume 21, Oxford University Press, pp.500-503, especially p.501; Letter from Eleanor Marx to Jenny Marx dated [London] 2 October 1882, in "The Daughters of Karl Marx - Family Correspondence 1866-1898", commentary and notes by Olga Meier, translated from French into English and adapted by Faith Evans, with introduction by Sheila Rowbotham, Penguin Books, London, 1984, pp.157-158.)。だが、本稿をまとめるために、私はガーネットについての言及をマルクスゆかりの文献の中で探したが、見つけることができなかった。なお、大英博物館におけるマルクスのエピソードを伝える文献として、我国でしばしば引用されるのが、ヴァルター・ヴィクトル著『マルクス伝』である(ヴァルター・ヴィクトル著長坂聡・小島恒久・原田溥共訳『マルクス・エンゲルス小伝』、1966年、労働大学新書72、労働大学発行、pp.46-47. Cf., Walther VICTOR, "Karl Marx", 1953, Der Kinderbuchverlag, Berlin, pp.49-50)。だが、この伝記は、旧東ドイツで出版された、子供向けプロパガンダ文献である。典拠は示されていない。ガーネットの名前も出てこない。このエピソードを調べるにあたり、名古屋図書館事務課職員の伊藤孝司さんの御世話になった。ここに記して

御礼申上げる。

(8)図書館のレファレンス業務の場合、利用者からの相談(リクエスト)により、鍛えられていくという側面が強い。数々の工夫で、利用率全国一を誇る千葉県浦安市立図書館の場合もそうである。今までのレファレンス事例をもとに、サービス向上に役立っているという(鈴木康之・坪井賢一共著『浦安図書館を支える人びと』、日本図書館協会、2004年、pp.10-22)。だが、近年、愛知大学では、諸般の事情により、司書資格をもっている事務職員が必ずしも図書館事務課に配置されるとは限らなくなっている。さらに、人件費節約という理由から、図書館事務課職員のうち、専任職員数が大幅に少なくなっている。これらの理由から、今後、レファレンス・サービスが低下するのではないかと私は憂慮している。

(9)戦後発足した国立国会図書館を中心に、国内

各種図書館がネットワークで結びつけられ、誰もが最寄りの図書館からあらゆる知識にアクセスできるようになっている。このような図書館制度作りに尽力した中井正一(国立国会図書館初代副館長、1900-1952)は、次のように延べている。「国立国会図書館は……(中略)……大きな集団として……(中略)……個人の記憶のかわりに資料の精密を極めた整理目録を用意せんとしている。個人の思惟に代って、委員会をもっている。何十年もの間の国家の如何なる出来事も記憶し、どんな天才よりも広汎な知識と意欲をもつ巨人となって、自らを創造しようとしている」(中井正一「真理は我等を自由にする」、昭和23年10月13日、国立国会図書館職員研修特別講義速記録(中井浩編『中井正一 論理とその実践 —組織論から図書館像へ—』、1972年、てんびん社、pp.91-92)。